
続行アクティビティ

春夏冬瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続行アクティビティ

【Nコード】

N8447L

【作者名】

春夏冬瑛

【あらすじ】

部活動取材が始まって約1ヶ月。いよいよ夏に突入し、どの部活にも大舞台が迫ってきた。

新聞部員、上月灯も遅まきながら取材活動に慣れてきて、ようやく自己を、そして周囲を見回す余裕が出来はじめた。

そうやって初めて気付くことが、いくつかあった。

例えば、部員達のこと。

例えば、自分の成長について。

そして例えば——仲間達との日々に、終わりが迫っていたこと。

No.0 実は、部内でメアド交換は済んでいます（前書き）

おおよそ3ヶ月間の放置、申し訳ありません。

ですがようやくそれらしいものが出来上がってきました。

このままスムーズに定期投稿出来ればいいのですが……やはりまだ就活中、約束は出来ません。

それでもゆっくり、楽しく、納得いくものを載せていくので、引き続きお付き合いよろしく願いします。

No.0 実は、部内でメアド交換は済んでいます

朝の7時。

矢伊原乃絵がバスルームから出たのは、ちょうどその時間だった。彼女が所謂朝シャン派であるのには2つの理由がある。一つは、低血圧だから。もう一つは、寝癖を直すのが面倒だからだ。起き抜けの彼女は、普段とは違って相当なズボラである。脱いだ服は片付けないし、2度寝、3度寝は平気で繰り返す。以前部屋の中がゴミ溜め屋敷になってしまったことまである。そんな訛りきった体を起こすため、朝に湯を浴びるのが必要不可欠となったのだった。勿論それ以降は、そういった諸々の問題は解決している。

髪を乾かし、櫛で解かし、制服を着終えたところで、先ほど脱いだ寝間着の中から簡素な電子音が鳴った。それが携帯電話の着信音であることはすぐに分かった。しかもこれはメール受信の音だ。

「何かしら……こんな朝早くに」

訝しみながらも、寝間着の中から携帯電話を引っ張り出し、ディスプレイを開く。

差出人は、「上月」となっていた。

「……上月？」

早速開封してみる。

『件名：無題』

本文：受験者対象講習会ってのが放課後にあるから、ちょっと遅れる。ごめん』

色もデコレーションも、顔文字も何も無い、質素な文面だったが、最後の「ごめん」の一言が何とも彼らしくて、つい笑いがこみ上げてくる。

「そんなこと、いちいち謝ることでもないでしょうに」
脱衣所から出て、廊下を歩きつつ返信メールを打つ。

『件名：Re・無題』

本文：知ってる』

居間に入る頃には、既に送信まで終わっていた。

まず最初に乃絵が見たのはテーブルの上。そこにはサンドイッチが、皿の上に綺麗に並んでいた。母親が出かける前に用意していた、乃絵の朝食である。ちなみに弁当は無い。「学校で食べられる」と言つて、以前彼女自身が断つたのだ。これ以上多忙な両親に仕事を増やさせたくなかった。

「いただきます」

これで、引越してきてからの3週間、全て一人の食事である。

両親曰く、「忙しいのは今だけ。これとあとドイツでの仕事が付けばゆつくり出来る」ということらしいが……以前もそう言つておいて臨時呼び出しがかかり、2週間ほど家に帰らないことがあった。乃絵としてはあまり期待していない。

別に一家団欒を望んでいるわけでもないし、今の忙しい家庭に不満があるわけでもない。元々友人が出来にくい性格であるため、これまで繰り返してきた転校も寂しいとは思つてこなかったくらいだ。ただ、今回だけは少し違った。

「……………」

紅茶を飲み干すと、乃絵は再び携帯電話を開く。次に見るのは電話帳である。

登録数は20件に満たない。その主な分類は3つ。家族。救済関連。そして、新聞部。

乃絵には、転校する度に、それまでの記録をリセットするという習慣があった。転校してから一度たりとも連絡してこないというのが一つの理由、もう一つは自分から人に話したいことがないこと。残しておいても使わないなら無駄でしかない。

ここで一つ面白い事実がある。友人がいないのなら、普通は誰からのメールが一番多いかというと、当然母親、ないし両親のどちらかだろう。だが、総受信数、送信数共に両親の名は一番上に来ない。一番上にいるのは――

「上月……か」

受信数、送信数どちらも、その一つ下とは2倍以上の差をつけている。そしてこの数は、今までに知り合った誰よりも多い。もしこれが母親にばれようものなら、彼氏がどうか冷やかされることだろう。

だが受信履歴を見れば、私用のメールは一つたりともない。全て部活関連の業務報告である。遅刻連絡とか、進捗状況とか、あとクラスメートから報告書預かってるから明日の朝渡す、なんていうのもあった。

別に自分を特別どう思っているとかは関係ない。灯はああ見えて副部長の肩書きを背負っている。まして肝心の部長は放浪癖持ち。部員や活動の管理は必然的に彼の責任になってしまっている。それだけのことだった。

だから、こんなこと喜ぶようなことじゃないのは分かっているが……。

「……………」

一つ嘆息して、乃絵は携帯を閉じた。

（あと1カ月半したら……やっぱり、消すのよね）

壁時計が7時20分を指している。家を出る時間だった。

No.0 実は、部内でメアド交換は済んでいます（後書き）

念のために表記しますが、こちらは「救済アクティビティ」から1週間後のお話です。「劇中ではそれしか経ってないのに、続きを載せるのに何ヶ月経ってんだ」と思う方、もっともだと思いますがここはどうか広い心で見てください。

あと当然というべきか、これ以降の大幅な修正変更はありません（やるとしたら誤字修正程度）。

No.1 しつこいようだけど、矢伊原は2年な（前書き）

書いてる間何が一番きつたって？

そりゃあ勿論、ちよっと気を抜くと、空気を読まないパロネタ祭になってしまうことでしょう。

No.1 しつこいようだけど、矢伊原は2年な

太陽がすっかり沈み、紺碧色に包まれた空。時計の短針が指すのは8の字である。

新聞部の部室にはいつもの5人。

ただし、その場の光景は明らかにいつも通りじゃない。

「……………」

部屋の片隅で、膝を抱えてさめざめと泣いている新聞部部长。明石慶介。

「……………」

不機嫌そうに腕を組み、脚を組んで静かに椅子に座っている、実質の部長。矢伊原乃絵（2年）。

「……………」

これまた不機嫌そうに、黙々とデスク上に積み上げられた書類と格闘する、（推定）校内一多忙な生徒会兼任部員。迫神航（2年）。

「……………」

そしていつの間にか、俺の隣に引っ付いてガタガタ震えている、一年女子部員。穂村理莉。

「先輩」

「何、穂村」

「さっき、何気なく部室の温度計を眺めてたんですけどね……………」

「うん」

「一分で、7度ほど下がってました」

「どうやら今日は、8時3分を境に気温が7度下がる日らしい。」

「……あーうん。まあ、しょうがないよ。地球だって、たまには羽目を外したいさ」

なるほど、部室に入った途端急に肌寒くなったのは、気のせいじゃないかったのか。

そして、そんな極寒——否、獄寒の地に晒され続けた穂村にも、

ついに限界がきたようだ。

「先輩ーこれなんとかして下さいよお。早く助けてくれないと、この国が湿地帯だってこと忘れちゃいそうです」

「奇遇だね。俺は今の今まで全く知らなかったよ」

「レスキューミー！ ハニー！」

「ハニーとか言われても」

袖をクイクイと引つ張りながら、穂村が縋ってくる。その顔は今にも泣き出しそうで、いつもの小生意気さと能天気さは見る影もない。

こいつ、見かけによらずビビリだからなあ。

「なんとかって言っても、事情が分からないんじゃないぞ。穂村、これは一体何事？ つうかいつの間にこうなった？」

「自分にもさっぱり。部室に戻ってきた時にはもうこの有様で」

穂村に聞いても分からない。となれば他に情報源を探さなければいけない。

じゃあ誰が適任か。

まずあの状態では、慶介は論外。次に矢伊原だが……うわ、なんかこつち睨んできた気がする。怖え……というわけで除外。

結果、というか考える時間自体が無駄だった。

「迫神君。あれ、何？」

慶介を”あれ”呼ばわりして指差すと、迫神君は一旦ペンを置いた。

「あの野郎の毒牙にかかった、哀れな一般生徒の成れの果て、です」
淡々と述べる。ちなみに”あの野郎”というのは……まあ、彼がそう呼ぶ相手は一人しかない。

その”一人”——矢伊原が、椅子から腰を上げた。

「演劇部で、明後日大会があるのは知ってるわよね」

唐突な問。されど決して解答不可能ではない問だった。

「まあ一応は」

演劇部は、日曜日に市営センターで開催される地域イベントに参

加する。厳密には大会じゃないし、そもそも優勝という概念もないから参加する必要も無いのだが、部長である遠藤明音曰く「夏の大会前にモチベーションアップを図る絶好の機会」らしい。

（というか、俺が答えられないわけじゃないじゃんか）

俺の演劇部を担当する周期は週一回。つまりこれまで皆勤賞なのだ。現在新聞部で共有している演劇部の情報は全て俺の報告内容だし、まして部室のスケジュール表に「日曜、演劇部、市センで大会」と書き込んだのは他ならぬ俺である。

それを知って何故今更？

聞き返してみようかと口を開きかけた瞬間、矢伊原が更に被せてきた。

「じゃあ、当日は演劇部に私達も同行することは知ってる？」

「……………」

精一杯の理解不能を表現すべく、首を直角に傾げる。

あれ、おかしいな。今まったく聞き慣れない単語が混じってた気がするんだけど…………私達も…………え、何？

「どう…………こう？ 瞳孔、え、何矢伊原？ そんな突拍子もなく目の話？ ひょっとして眼科に行きたいとか？」

「先輩、何をトチ狂ったこと言ってるんです？ 矢伊原先輩はこう言っただけです。各駅停車の利点は車内が空いてることだって」

「…………残念ながらどっちも大外れ。というか穂村、あんたはミスリードにすらなってるわいよ」

そうだね。いくら混乱状態の俺でも、穂村が間違ってるのだけは分かる。こいつが言いたいのは疑う余地なく「鈍行」だ。「どうこう」とすら読まない。

「同行。英訳でアカンパニー、ついていくって意味のほうね。要するに私達も大会会場に足を運んで、演劇部取材するのよ」

「あ、あなるほど、そーいう意味ね…………」

つつか冷静になって考えると、それ以外にない。数秒前の俺が恥ずかしいことこの上ないぞ…………なんだよ、目の話って。矢伊原が眼

科なら、俺は脳外科に行け。

「んで、いつ決まったのそれ？ 俺初耳なんだけど」
気軽に聞いた。

「3週間前から決まってたことよ」

「へー。3週間前かあ。つてことは取材始めてすぐだね。そーかそーか、もうあれから3週間も経つんだあ……」

ほんの少しを過去を懐かしみつつも、半分くらい現実逃避の意が混じっていた。

「……………」

「すみませんでしたあつ！」

矢伊原から凍りつくような視線を突き刺され、何の抵抗もなしに流れるように謝罪する。正直に言おう、かーなーり怖いよ。

「……別に誰もあんたが悪いなんて言ってないでしょ」

「？」

しかし矢伊原から返ってきたのは、意外にも俺へのフォローだった。これで俺も慶介の二の舞か、と腹を括っていたのに拍子抜けだ（いや、まあ何も無いならそれに越したことはないんだけど。つうか叱られたいとか、もうそれ病気）。

「あれ、そうなの？」

「あのねえ。もし本当にあんたに責任あるなら、帰ってきて真っ先に問い詰めてるわよ」

「お……おお、そっか。そーいやそうだ」

「はあ、何でもこう会う人会う人……」

思い悩んだ顔で嘆息を漏らす矢伊原。

「さつき、演劇部の部長が訪ねてきたんです」

迫神君が話を引き継いだ。

「その時になつて初めて実地取材の話を知ったんですけど——」

何でも、3週間以上も前に持ちかけられたのに、2日前の今になつてもちつとも続報が入らないから、流石に心配になったのだとか。

「あのー迫神先輩。ジッチ取材つて何——」

「——さらに詳しく聞くと、肝心の、実地取材を持ちかけた部員というのが部長ということですよ」

「慶介？」

そういえば3週間前というと、俺達が取材活動を開始した週だ。演劇部の一週目は俺と慶介が担当だった。それ以降慶介は担当してなかったから……多分その時だな。

「先輩ー。ジツチの取材って、どんな取材か分かります？　ちなみに自分は、有名人の名前だと踏んでいる——」

「あー何となく読めてきたぞ。つまりあいつ、初っ端から大会取材の話を持ち出すとかいう行動力を披露しておきながら、俺達に報告するのを忘れて」

「今に至る。それで結果あの野郎の逆鱗に触れ……ああなったと。そういう経緯ですよ」

言って、再び慶介に注ぐ視線には精一杯の憐れみが込められていた。慶介の奴、きつとんでもない折檻を受けたんだろうなあ。

「そうか、十中八九取材って意味ですね！？　つまり、多分その日は取材になるだろうと。なーんだ、予定の話してたんですねー」

「え、何？　穂村今何か言った？」

「……大人しくしてます」

「？　お、おお」

慶介の隣に並んで、同様に膝を抱える穂村。同じ気分なのか、仲が良いのか、それとも重力に逆らう生活に耐えられなくなったのか。3番だったら、しょうがないから校内限定で補助を名乗り出てやらなくもない。あれでも一応可愛い後輩だ。

まあ、放つといていいや。俺だけ覚えてればいいだろうし。

「それでも最初は何かの間違いかと思っただけですけどね。何しろ3週間前とはいえそんな大事なことで、普通忘れるなんてまず無いですから。でもいざ事情を聞きだしてみると、どうも意味不明なことばかり語りだしてくるもので」

「意味不明？」

迫神君は、「えーと」と、眠っている記憶を無理矢理引きずり出そうと呻りだした。何だろう、それだけ記憶しにくいこと？

「何でも、その日はDVDの発売日だとか」

早速心が折れた。

「後はなんだったかな……」ようせい”がどうか、”かんるい”とか”こうえん”とか、”かいいん”が素晴らしいとか……」

さり気なく聞き覚えのないシリーズ名が。

「そんなことを長々と自慢していたかと思ったら、今度は鞆からDVDケースをこのデスクに並べて、妙に熱の籠ったレクチャーを始めたんです。ちなみにケースに描かれてたのは多分俺達の年齢だと入手が——」

「なんか、ごめんなさい。もう、あいつの友人の一人として、色々、様々な意味でマジごめんなさい」

「上月先輩が謝ることじゃないですよ。気持ちは分かりますが……兎に角、そこまできてようやく察したわけです。確実に、忘れているな、と」

穂村。早速で悪いが、今お前が戦力外であることが悔やまれる。

俺は今、すぐにでも前後数秒の記憶を抹消したくて気が狂いそうだ。(つつか慶介……お前まさか、わざわざ布教するために毎日AVを鞆の中に忍ばせてる、なんてことないだろうな……)

今まで、お前と疎遠になって俺は大丈夫なのか、なんて考えてきたけど……何故だろう、むしろ一人になったほうがマシな気がしてきたぞ。

No.1 しつこいようだけど、矢伊原は2年な（後書き）

ここを作るのにとんでもない時間がかかりました。やっぱり一つのシーンで5人を動かすというのは難しいですね。

No.2 非行動的2分間

唐突だったとはいえ、矢伊原はその場で演劇部部長遠藤さんに、必要最低限の伝達は済ませていた。

明日新聞部でミーティングを行うこと、そこに彼女も同席して欲しいこと。他にも、そこで大まかに何を話し合うか等。遠藤さんはそれらのことに頷いて帰宅していったという。

「でも多分それだけで話し進めようとしたら、絶対不具合が生じると思うの。だから、今日のうちにある程度まとめて明日を迎えたい」そう言って矢伊原は、黒マジックを片手にホワイトボードの前に立った。

「うへえー結局休みなしですか。それならそれで今日ぐらいゆつくり休みたいですよー。というか明日は寝たら起きません。起きない心意気です」

「早く帰って、下の兄妹共に飯食わせないとならないんだけど？」穂村と迫神君から口々に不満が飛び交う。が、これはそう責められるものではない。何しろ時間が時間だ。各々家庭の事情も絡んでくるだろうから、一概に根性なしでは片付けられない（穂村のは単なる弱音だけ）。

「あんた達……」

矢伊原の、若干時が籠った呟きが聞こえた。

まずいな。もしかしたら「今日が嫌なら明日の朝一に来てもらうけど、それでいいのかしら？」とかトゲのあることを言いそうだし。そうすると、迫神君がキレて、矢伊原との小競り合いが始まるだろう？　それで穂村がビビりまくって……。

これ何度目だよ。出来れば避けたい。

「ま、まあ気持ちは分かるから。でもあとちょっとだけ、ね？　矢伊原が悪いわけじゃないんだし」

矢伊原から二の句が飛び出す前に、穂村と迫神君を宥めに入る。

「それにさ、矢伊原もそんなに時間取ろうなんて思っ
てないだろ？」

不意に俺に話を振られ、怪訝な表情を浮かべる矢伊原。
しかしすぐに「ああ」と小さく頷いた。

「そうね。円滑に進めば10分もかからないわ」

それを聞いて、心の底から安心した。勿論こつそり。

一瞬、俺の進言なんか豆腐の如く切り捨てられるんじゃないかと思っただけ……。矢伊原、最近少し丸くなってきた気がする。おかげで最近
は迫神君との衝突頻度も少なくなってきたほどだ。慣れたきたのかな？
そういえば矢伊原って、まだ転校してきて日が浅いんだよな。忘れがちだけど。

「十分くらいなら、なんとか」

「それに、腐っても連帯責任ですからね」

穂村と迫神君も、ばつが悪そうに頷く。上手くまとまってくれたのはいいけど、これだと2人が悪者みたいな扱いだ。

「まあそれにさ……」

少しでも払拭すべく、言い加えてみる。

「こうなったのは、半分くらい俺にも責任あるし」

「どういう意味です？ それを言うなら部長のほうでは？」

「そうですねー。部長がエロに腰を抜かしてなければ、こんなドタバタすることもなかったんですから」

「お前はこれ以上頭のネジを抜くな」

迫神君が心底嫌そうな顔をする。天然で下ネタを披露する女性以上に手に負えない人種はいない。その気持ちよく分かる（ちなみに多分、正解は”現を抜かす”だ）。

「いやなに。俺が普段から流されないでビシッとか何か言えてれば、ちよつとは違ったかなって」

「何か……ですか？」

「まあ例えば……そうだな。『AV持ち歩くとか気持ち悪いことしてんな、この盛り犬。保健所にとっ捕まって去勢されたらどう？』」

とか」

「……先輩。人が苦手とか、本当は嘘でしょう……」

「そんな馬鹿な」

そこまで言いかけたところで、背後に気配。

振り向くと、

「……………」

我らが新聞部部长、明石慶介が無言で仁王立ちしていた。

「あ、部長おはようございます」

「もういいんですか？」

「いや、あのこれはさ。お前には美崎さんという立派な彼女がいるわけだし、ちょっとは落ち着いた行動とらないとまずいんじゃないかって意味で……………」

「……………」

三者三様に慶介に声をかける。しかし、何故か慶介はそれらには一言も応じない。

「……………あ、あの慶介さん？」

「……………お」

「お？」

「俺の将来、心配してくれてありがとな親友！」

涙混じりにそう叫んだかと思うと、慶介は迅雷の如く速さで部室を飛び出して行ってしまった。

「あ、ああ……………お大事に」

あまりに怒涛の展開に呆然としていた俺は、そう声をかけるので精一杯だった。そしておそらく、本人の耳には届いてない。

「青春色の涙を流して去っていききましたねえ。夕日を背に浜辺を走る、若い男女のように。……………ところで、部長はどこに向かったんでしょう？」

「頭を冷やしにいったか、家に帰ったか……………のどっちかだったらいいんだが」

「もう手遅れだけど、言うべきじゃなかったなああれ」

こんなことになるなら、美崎さんにバラして叱ってもらうまで、言わずに我慢してればよかった。だって、あの人なら敵前逃亡すら許さないはずだから。

今後もまたこういう失敗をするかもしれない。その辺も踏まえて、休みが明けたら美崎さんに話そう。……慶介には二重苦だけど。

「……そろそろ、ミーティング始めていいかしら？」

そして矢伊原、この騒ぎの間ずっとボードの前で待ってくれてた君は、本当に優しくなったと思う。

No.2 非行動的2分間（後書き）

2分間の出来事です

No.3 静寂の寂は寂しいの寂

結局ミーティングは宣告通り10分で終わり、直ぐ様解散となった。

しかし俺はそれと同時に帰ることは出来なかった。まだレポート作成が終っていなかったためだ。

「はあ、やっぱり土日休みなんでしょうか。上手く立ち回って、自分一人のんびり午後まで寝ていようと思ったのに……」

穂村は溜息混じりに言い捨て、

「そう言うなって。俺だって、明日は”幼性シリーズ”最新作の発売日なのに……予約までしたのに店に行けないなんて……」

慶介は彼女を差し置いてとんでもないことに落胆して、

「お先失礼します」

迫神君は礼節を弁えて、

「明日に響くから、さっさと書き終えて帰りなさいよ」

矢伊原は厳しく心配しながら、先に部室を後にしていった。

それから数分、久しぶりにたった一人だけの部室を味わって、鍵を閉めた。

そうだった、と。不意に思い出した。

(1ヶ月くらい前まで、これが普通だったんだよねあ)

迫神君がまだ幽霊部員で、慶介がちつとも部室に来なくて、穂村も今以上に補修ばかりで。

この部室には俺しかいなかった。

別に寂しいとは思っていなかったし、それで当たり前だとも思っていた。

だが矢伊原が来てからは、その価値観は見事に裏返った。

今では、一人しか部室にいないことのほうが、非日常的に思えてしまっている。

(人付き合いって……)

麻薬みたいなものだ。一度他者を味わってしまったと、もう自分一人だけでは何かが物足りなくなってしまう。

だからどういう事かというところ。

離れてしまつて自分は大丈夫なのか。それを考えているだけだ。

（そう……あと１ヶ月しかない。俺が、部員でいられるのは）

俺の新聞部員としての最後の仕事は、学祭展示。それが終われば、進路の関係もあり引退せざるを得ない。

この集まりも、猶予は残り一ヶ月。残り一ヶ月でおしまい。

それだけではない。引退して、約半年後には卒業。これまでのように、見知った顔とのんびり過ごすのもおしまい。

自分は半年後、誰といるのか。誰か知っている人といふのか。それとも、完全に一人になつていけるのか。

こんなザマで、一人に耐えていけるのか。

「……………」

不思議なことに、出てきたのは溜息でも震えでもなく、舌打ちだった。

（進路つていうのは、本当に……）

いい迷惑だ。

何も考えないで生きたつて、別にいいじゃないか。それを、胃がボロボロになるまで考えることが正しいみたいにして、しかも樂觀視は駄目、それと悲観も駄目。

じゃあ何をすればいいんだか。

「うわ、機嫌悪そー。アカリ先輩ー、今の舌打ち、後ろ１０メートルまできつちりばつちり聞こえちゃってますよー」

「……………ん？」

別に機嫌が悪いわけじゃない。

それよりもこの声が気になった。もう散々聴き慣れた、調子の良さそうな少女の声。

こういった、プラスに振り切れた声質の知り合いは、俺には今のところ２人しかいない。そして、そのうちの一人である穂村はとっ

くに下校済みだ。

ならば残るは。

振り返ってみてみれば案の定、俺の見立てに間違いはなかった。

「なんだ、柳本か」

「なんだとは失礼な言い草ですね。そんなに私では不満ですか。あれですか、小説でいうと私は既にマンネリキャラ化しているとも言いたいですね。でも我慢してください、現実問題そんな見飽きたからってゴキブリみたいにホイホイ出会いが転がっているわけではないんですから」

「嫌な例え方するなよ。足元がゾツとしてきたじゃないか」

柳本華南。俺の一つ下で女子バスケット部所属。自称「攻撃的男性恐怖症」であるくせに、俺に向かっては一転して饒舌になるという、何やら自分の特徴に一貫性の無いやつだ。言葉遣いもそうだが、俺と顔を合わせても平気な理由は「男らしく見えないから」と言い切る手前、こいつ明らかに俺を嘗めている節がある。そのくせ、何故か腹を立てる気になれないという不思議な女子。

こいつに限っては、本当に、いろんな意味で、別格で謎だらけだ。

「こんな夜遅くまでお疲れ様です、上月アカリ先輩」

「柳本こそ、こんな時間まで大変だね。それと、それが事実であるかのように正々堂々と俺の苗字とその不名誉なあだ名を合成させるのは止める。そっちの名前で正式に定着しちゃったら君どうしてくれるんだ、俺外を歩けなくなるぞ」

「そんな大袈裟な」

「柳本には分らない、この前知らない男子に呼び出されて『あれ、上月って女だと思ってた……』つつってショック受けられたときの俺の気持ちは。俺の人生初の被告白シーンは相手が男である上に勘違いだったんだぞ。俺もそうだけど相手の男子もすっげえ哀れだったんだからな、俺あの時なんて言えば良かったんだよ」

明らかに、柳本曰く「3年の上月アカリ先輩」が周囲に蔓延しつつある証拠だった。

「それはそれは、ご愁傷さまでした。……………なんという計画通り」

「おいコラそのクソ下級生。副音声丸聞こえた」

「きゃー先輩ったら、口先だけ怖あーい」

「……いつか殺してやる」

勿論、「屈服させる」という意味だ。

「それはそうとアカリ先輩。冗談じゃなく、最近忙しそうですね。あの新聞部が嘘みたいですよ」

それに関しては俺も頷かざるをえない。

「これも矢伊原の手腕ってやつだね」

「莉理ちゃんも、毎日ヘトヘトだとか、こんなの部活詐欺だーとか、結構堪えてるみたいですよ」

「あいつビツクリするくらい根性ないからなー」

「アカリ先輩は、大丈夫なんですか？」

「ん、俺？」

急なことに一瞬言葉に詰まるが、考えるまでもなかった。

「もう慣れちゃったよ。こう見えて、集団に埋もれるスキルに関しては一日の長があると、唯一自負しているものでね」

「あらあらまあ。アカリ先輩のくせに意外と忍耐強いじゃありませんか。先輩のことだから、家の帰ったら親に八つ当たりして、あまつさえ妹をぶん殴ってストレス解消するくらいはしてるかと思ってましたよ」

「それは一体何回反転した結果の俺なわけ？ それと、幾ら何でもまだ4歳になったばかりの妹相手に暴力は流石にあり得ないぞ」

「妹さんがいるんですか？」

「まあね。あれ、今妹がどうか言ってなかった？」

「喩え話ですよ」

「適当に言っただけか……」

家族構成が、バレてしまった。いや、だからといって何が困るというわけじゃないけど。

「そういう柳本だって、忙しいんじゃないの？ ほら、明後日また

練習試合じゃん」

余談だが、この練習試合にも俺達新聞部は取材に向かう。明後日（11日曜日）に取材の約束を取り付けた部は3つ。

演劇部。女バス。それと将棋部。

基本的に一つの部を2人で担当する。ただし、将棋部の方は通常活動（つまり試合とかではない）で、しかも慶介が担当すること、ここで、そこに限って1人。後の2つは明日決めるということ、あのミーティングは終わった。

「そう！ それなんです！」

途端に、柳本が声を上げた。

「いやあなにか忘れてるなと思ったら、そうだそうだつい10分前まで部長が言ってたことでしたよー」

何の話かは分からないけど、忘れるのが早すぎなのは確かだ。

「実はですね、明後日の練習試合で私、控えに入ることになったんです」

「へえ」

「これはビックチャンスです！ 当日活躍できたら、夏の大会でレギュラー入りも夢じゃありません！」

「え、それは凄い」

柳本はまだ2年。大抵レギュラーメンバーは3年が優先されるものだ。そこを押しつけて入るということは、相当の実力がなければ叶わない。

つまり、

（こいつ、頑張ったんだなあ）

自分が努力して、それがちゃんと結果に出て、柳本はどんな気持ちだろうか。こればかりはスポーツマン特有の感覚だろうから分かりかねる。ちょっと羨ましいけど、まあそれはこっちの道を進まなかった俺が悪い。

「明後日、上手くいくといいね」

「え——あ、はい……そうですね」

少し穏やかな気分になって、つい励ましの言葉をかけたところ、
どういうわけか柳本が言葉を詰まらせた。

「なんだよ、いきなり狼狽えちゃって」

「狼狽えたんじゃありません。先輩がいきなり声色変えるから、こ
う、なんというか、ビクリしたんです」

「変えるって、俺普段からこんな感じだよ？」

「違いますよ。先輩はもっと、刺のある言葉遣いですって」

「そうだった？」

言われるとそんな気がする。こいつ、いつつ俺をバカにしたよ
うな事言って、しかもこつちが何言っても「怖くないですよー」つ
て顔して。そんなだからつい言葉もきつくなってしまう。

それと似たような性質は穂村にもあるのだが……あいつにはそこ
までのことは言っていない。

（何か違うのかな……？）

まあいいや。

「それより、明日も練習だろ。こんなところで油売ってないで、早
く帰れよ。夜道だって安全じゃないんだからな」

「な、何故明日も練習だって知ってるんです！？ ま、まさか先輩、
噂の覗きスポットから四六時中私たちの体操服姿を視姦していたの
では——」

「取材してるから知ってたんだよ！ 何でもかんでも俺を変態扱いす
れば話が整うと思うたら大間違いだ！」

「失礼しました。先輩は、視姦してただけですよね」

「今、思い改めたつもりで実は何にも変わってないからな！」

「ご心配なく。覗き穴はそのまま塞がないでおいであげますから。
普段から何かとお世話になってるお礼です」

「真面目に恩を返す気はないのかよ！」

そもそも今まで、特別こいつの役に立った覚えもないのだが。
気の抜けた笑いで返してから、柳本が続いた。

「冗談ですよ。返し方は、ちゃんとじっくり考えていきますって」

「……………」

その言葉の意味を、今ひとつ理解できない。

顔に出ていたのか、柳本が「全然自覚ないんでしょうけど」と、俺の懷まで軽い足取りで近づいて、見上げてきた。

「私は実際、アカリ先輩のおかげで随分助かってるんですよ？　はつきり言つて、次の試合のことだって先輩がいなかったら叶ってないです」

「ますます意味が分からない」

「同盟つて、覚えてます？」

同盟。それは、何の脈絡も無しに柳本が提案してきた言葉。「自分達の悩みは根本で似通っているから」という理由で、お互いに協力していこうという、確かそんな主旨だ。

「覚えてるよ」

だがそれは、発足したのはいいが、それ以降まったくそれらしい活動を始められていない。それどころか、お互いのトラウマについて真剣に話し合ったことさえない。

「何、そろそろ本格的に始めようって話？」

「いえいえ。もうとつくに、同盟は機能しています」

「……そうなの？」

「まあもつとも、そんなふうに聞かれるってことは、今のところ私にしか効果がないってことなんでしょうけど」

微笑に嘆息が混ざる。

「結局、何の話？」

「だから、頑張つて恩を返そうという話です」

「……よく分からないけど、別に無理しなくていいからね。さっきじゃないけど、覗き穴とかマジでいらないから。そんなん貰うくらいなら何もなくていいよ」

これから夏に向けて忙しくなるだろうから。俺のせいで「練習の成果が出ませんでした」と言われても、責任が取れない。

すると「何を言いますか」と憤りを顔に、柳本は両手を腰に当て

た。

「そんなゆとりの極みみたいなこと言ってたら、あれよあれよという間にタイムオーバーになっちゃいますよ。半年したら先輩卒業でしょう?」

「ああ。そういえばそうだった」

この学校を去ったら、新聞部だけじゃない、柳本も居なくなるんだった。

「まったく。呑気すぎます。あまりにおっとりし過ぎて、アカリオットセイ先輩って呼びたくなりますよ」

「……それ、穂村が言ってたことでしょ」

「分かります? あの子やつぱり、言葉遊びの才能ありますよね」

「少なくとも、頭がグニャグニャに柔らかいのは確かだ」

そして、同じくらい緩いんだ。

「さて。いい加減帰らないと」

傍にあつた教室から時計を覗き込んでビックリ。10分くらい話し込んでいることに気づいた。明日が休日だからといったのんびりしてもいられない。帰ってからやるべき事は山積みなのだ。

「私も。明日は朝早いですからね」

「そっか。まあ適度に頑張れ、スポーツ少女」

「……先輩って、やつぱり隠れエロ?」

「何だよそれ! いい加減俺を無理矢理変態扱いしてオチをつけようとする癖、何とかしろよ!」

「でも先輩。スポーツといえば汗。汗といえばスポーツと官能。そして少女といえば、エロですよね?」

「頼むから、お前まで慶介みたいなこと言い出すのはやめてくれ!」

「うっ——」

「ど、どうした? どっか具合悪いの?」

「よくも私の前で男の名をつ!」

「お前の症状はそういう類のものじゃねえよ! 狼男かつ!」

些細なことで会話がどんどん繋がっていくこの感覚は嫌いじゃないが。

何とかそれを絶ち切って、間もなくして俺たちは別れの挨拶を済ませた。

（そういえば……）

あいつ、会ったときみたいに、長々と話さなくなったな。

あのテンションはいくら性とはいえ疲れるだろうとは思ってたけど。聞き手側も余計に集中しなくていいから楽でいいけど。

まさか俺に余計な気遣いをしているのでは？ いや、あるいはいい感じにリラックスできるようにしているだけなのか？ それとも、本当に俺に対して敬意の欠片も無いだけなのか？ 最後の一つだったらそろそろ本気で、あいつと腰をすえて話し合わなきゃならないぞ……。

（まあ今度、それとなく聞けばいいか）

そうだ。

今日に限るべきことじゃない。

明日だって、来週だって、あいつと話すことはできるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8447/>

続行アクティビティ

2010年12月11日20時10分発行